

「創立史」から「成立史」へ

——石川禎浩『中国共産党成立史』をめぐる

中国共産党はどのようにして誕生したのか？ 党の創立にまつわる回想録のトリックをあばき、党の創立に占める共産主義運動の国際的契機の大きさを、「ミンテルン・アーカイブ」などの原典資料を博搜しつつ明らかにする。党の「創立史」を「成立史」へとトラスチックに転換した本書は、中国共産党創立八十周年に生まれた最高の学問的成果である。

石川 禎浩

〔京都大学人文科学研究所助教授〕

× 緒形 康

〔神戸大学文学部助教授〕

謎だらけの

中国共産党第一回全国代表大会

緒形 中国共産党史を専攻される石川さんがこの度、岩波書店から『中国共産党成立史』という大著を刊行されました。構想、資料収集、執筆に十年を費やしたという文字通り渾身の著作です。よく知られているように、党史は他の歴史分野の研究に比べ、強い政治的色彩を帯びて

います。もちろん、その創立史も例外ではありません。

石川 中国で中共創立史がまがりなりにも政治のくびきを脱して、学術的に研究されるようになったのは一九八〇年代以降で、邵維正氏らの実証的研究がその先鞭をつけました。創立七十周年にあたる一九九一年には、『中国共産党創建史』（邵維正著、解放军出版社刊）をはじめとする高水準の創立史研究が一斉に刊行され

ています。中共党史研究に長い歴史を持つ日本では、八〇年代以降、逆に革命史や党史の研究が低調期に入っています。中国では、創立史は党史研究の主要な分野の一つであり続けています。その邵氏の推計によれば、この二十数年間に発表された中共創立史関連の著作は、専著だけでも二十数種、論文にいたっては二千五百篇を超えているそうです。緒形 驚くべき数字ですね。しかし、こ

れだけ先行蓄積のある領域をわざわざ研究しようと思いついたのは、どういう理由でしょう。

石川 もちろん、オリジナルな領域を独自に切り開いていく歴史研究のスタイルもあって、今日ではそれを志向する人の方が多いでしょう。ただ、オリジナルな領域と称するものの中には、はたして切り開くに足るだけの価値があるのか、首をかしげざるを得ないものも少なくありません。それならばいつそのこと、多くの人が研究しているながら誰も徹底して解明できていない問題を自分がやってやる、という気持ちでどこかにあったのだと思います。さらに中共創立史の場合は、俗な話ですが、本家の中国のそれを含めて、内外の先人の業績を凌ぐものに仕上げるという、見やすい目標を立てられますから。

緒形 それら膨大な数の研究蓄積が示すとおり、中国共産党の創立史はなお多くの謎に包まれていますね。そもそも第一回代表大会に出席した人数からして、「二人」説と「一三人」説があつてハッキリ



石川慎浩 [Ishikawa Yoshihiro]

りしない。閉幕日についても論争が絶えません。

石川 おっしゃる通りで、中共一大の出席者数（二人か一三人か）と会期（特にその閉幕日）は、長きにわたつて党創立史研究の最大の謎で、回想録の比較検討にもとづく数多くの考証論文が発表されてきました。中共創立史研究の中で言えば、この二つの謎に関する考証はそのハイライトにあたります。

緒形 石川さんは本書の中で、回想録に依拠して記述を進めることに、一貫して慎重な態度をとっていますが、とりわけ中共一大に関しては、これまでの研究のように食い違いの多い種々の回想を無理に整合させることはせず、むしろ中共一大が人民共和國時期になつて、実態以上の象徴的意味を付与されていく過程の方に力点を置いていますね。

石川 もちろん、個々の回想の内容を一つ一つ吟味していくことも大事ですが、それら回想録全般を規定している状況や枠組みそのものを明らかにしないと、創立史に関する種々の回想録がなぜこれほ

どまでに錯綜してしまつたのか、その根本のところ把握できなくなると考えたからです。

緒形 それが董必武の回想録に関する検討につながっていく。

石川 ええ。中共一大出席者の回想録は比較的多いのですが、中でも、包惠僧、李達とならんで、しばしば大会の経過を振り返った董必武のそれは、出席者の中でも終生党を離れなかつた要人の回想だつたため、とりわけ高い評価を与えられています。ところが、この董必武の一連の回想そのものが、実は大会の出席者数をめぐって、途中で見解を変えらう奇妙な経過をたどっているのです。

董必武の一大回想

緒形 董必武は、建国後の五〇年代から六〇年代にかけて、つまり政治的激動の時期に、正式代表は「一三人」いたという見解を変えて、「二人」説を主張するようになります。問題は開幕時に一三人いた代表のうち、誰が正式の代表でなかつたかです。董必武の証言はその点で

前後に食い違いを見せますね。

石川 これがなかなか面白い。その変遷を詳しく分析してみたところ、次のことがわかりました。①大会出席者を二人とする初期の通説は、一九四九年以前になされた毛沢東の何度かの談話に起源し、その後の関係者の回想は直接、間接にその影響を受けていること、②董必武はその時期にあつても、あくまで一三人出席説をとっていたが、一九五九年に中央檔案館が提供したロシア語文献（中共一大当時の報告文書で出席者数を二人とする）を見るに及んで、最終的に二人説に転換したこと、③一方、董必武がそれと同時に鑑定を依頼された他の一大関係文書の中に、檔案館側の加工資料が混じっていたため、彼の誤認を招き、その結果、彼は誤つた内容の談話を『人民日報』に発表してしまつたこと、④のちに自らの誤認に気づいた董必武は、関係方面に事情を説明してその訂正につとめたが、彼の訂正談話は文革の嵐の中で公表されず、前述のロシア語文献ともども秘匿されてしまつたこと。

緒形 董必武は当時の国家副主席、党内では中央政治局委員でもあつたわけですが、その彼にしてかかる状況であれば、それに比べて社会的地位など無きに等しい李達、包惠僧、劉仁静ら大陸にとどまつた一大出席者の回想が、より不確かな記憶のまま、時の政治状況に翻弄される運命に見舞われたことはむしろ自然ですね。

石川 つまり、回想録に依拠する中共一大の研究は、資料管理者——董必武の例で言えば、中央檔案館——からの不確かな情報提供と「定説」の「学習」によつて回想が歪み、その歪んだ回想が研究や「定説」にフィードバックされるという悪循環をたどつてきたと言えます。その上さらに、誤つた回想の訂正が容易に公表されず、最も信頼すべき原文書も「國家機密」扱いされるとあつては、史実の解明をめざす研究などそもそも望むべくもないでしょう。私が中共一大の出席者や会期の問題を、中共一大を特別視する「意識」と回想録作成者の「政治的立場」の関数に他ならないと述べたのは、そのた

めです。

緒形 そうした点も勘案した場合、中共一大の出席者の顔ぶれ、その会期に関する本書の考証の結論は、どのようにまとめられるでしょうか。

石川 大会代表は当初、一三人でしたが、大会期間中に陳公博が会を離れたため、大会の模様を詳細に報告したロシア語文献「中国共産党第一回代表大会」は代表者数を一二人と表記したのだと思います。これまでその参加資格が問題視されてきた包惠僧は、たまたま大会に列席した傍聴者でもなければ、陳独秀が個人的に指名派遣したものでなく、広州の正式代表です。つけ加えると、この結論は蜂屋亮子氏の考証に大きく依拠しています。一方、大会の会期は七月二三日から三一日までです。

回想録という「打ち出の小槌」

緒形 董必武の回想によってもたらされた混乱が示唆するのは、回想資料に依拠して党史研究を進めることのほらむ問題点と言えるでしょう。

石川 緒形さんもお感じだと思っていますが、本家中国で進展する中共創立史研究に対して、私は終始ある種の違和感をぬぐい去ることができませんでした。それらの研究が帯びている政治性もさることながら、むしろ研究の手法そのものに対して、そうでした。その不満は、大きく言って二つに集約されます。第一に、これまでの研究は、過度に回想録に依拠する傾向が強く、個々の回想録の作成過程やその信憑性に関する検討がほとんどなされていないこと、そして第二に、社会主義思想の伝播や中共の組織形成をとりまく国際的契機に十分な注意が払われてこなかったことです。

緒形 『中国共産党成立史』の斬新さは、今指摘された第一点、回想録の作成過程そのもの——例えば、先ほどの董必武のケース——にメスを入れたことにあります。

石川 中共創立史の研究が回想録偏重であるのは、もちろんそれなりの理由があります。結党時期の中共は、極めて少数の知識人によって構成される秘密組織で

した。第一回大会当時の黨員は、全国でわずか五十数人だったと伝えられています。当然、残された結党前後の第一次資料はごくわずかで、特に組織の具体的形成を物語る文書資料は皆無に近いといつてよいでしょう。中共創立史の研究者は長期にわたって、各種の回想録に依拠して研究を進めるより他になかったのです。

緒形 その結果、中共創立史研究は、他の歴史研究分野に比べて、資料に占める回想録の割合が突出して高いという特異な性質を帯びる一方、中共成立をめぐる研究量の異常なまでの多さは、結果として、種々の回想録をさまざまに解釈した推測が乱れ飛ぶ状況を惹起してしまっただけですね。

石川 そして、そうした状況がさらに、回想録に依拠したある「推論」が根拠薄弱な別の「推論」を生み、それが安易な相互参照をへて、いつの間にか「定説」になってしまふという不可思議な事態を招くことになったのです。

緒形 石川さんの絶妙な比喻を使えば、

回想録は多くの場合、それぞれの研究者にとつて都合のいい「史実」を生みだしてくる「打ち出の小槌」だった。そうした「史実」が中共創立史の「定説」になった典型的な例として、人口に膾炙した「南陳北李、相約建党説」を挙げることができます。

「南陳北李、相約建党説」

石川 「南陳北李説」には、さまざまなバリエーションがありますが、陳独秀が一九二〇年初め（二月ごろ）に官憲の目を逃れて北京を離れたさい、その脱出行の途中で李大釗と共産党結成を話し合ったということでは、ほぼ一致しており、中国共産党の党史研究部門もこの説を採用しています。ここで大事なことは、その時期、すなわち両者の話し合いがソビエト・ロシアからの接触（同年四月のヴォイチンスキの来華）以前であることで、この説には、中共の創立はソビエト・ロシアの差し金ではなく、中国人共産主義者自身の努力によるものだという意図が込められているのです。一見些細なことがら

のようですが、事は中共の創立がソビエト・ロシアの革命輸出の結果だったのか、それとも中国人自身による革命運動の産物だったのか、という本質に関わる問題を含んでいます。

緒形 この「南陳北李説」の根拠もいくつかの回想録ですが、もとをたどれば、全て李大釗の友人であった高一涵の回想に収斂します。高一涵が一九二七年に武漢で開催された李大釗ら革命烈士の追悼式典で演説したさいに述べた一節がそれですね。

石川 だが、不思議なことに、高が同じ時期に執筆した「李大釗同志略伝」という文章の方には、北京脱出の模様が生々しく描かれているにもかかわらず、先の演説にあった「共産党結成を話し合った」という肝心の部分が抜け落ちていたのですよ。これ自体問題ですが、さらに問題なのは、この高一涵は陳独秀らの北京脱出行の時期、実は日本に滞在中で、彼らの脱出行の詳細など知りうる状況になかったということです。

緒形 高一涵は回想で、当時自らも北京

にいて陳独秀らの脱出行に協力したと述べていて、それが彼の回想の確かさを裏付けるものとされてきたわけですが、それが根底からくずれてしまう。

石川 ええ。彼が語るリアルな脱出行の様子は、悪く言えばすべて脚色、好意に解釈しても伝聞にすぎないということになります。不思議なことに、これほど重要な回想ですら、実はこれまで真剣な資料批判がなされてこなかったのです。中国の研究者の中には、先の高一涵の演説をさらに敷衍して、中共の結成は「マルクス主義を信ずる中国の革命家が独立、自主的に進めたものである」と結論づけるものまであります。

緒形 しかし、中共の創立にソビエト・ロシア、コミンテルンが大きく介在していたことは、そもそも疑問の余地のない事実ではないのですか。

石川 おっしゃる通り、コミンテルンなくして共産党はありえません。少なくとも各国の「共産党」なるものの成立は、第一義的にコミンテルンとの関係（コミンテルンの各国支部）において認知され

るものなわけですから、コミンテルンの介入は党結成の不可欠の要件であることに、疑問の余地などありません。これに對して、従来の中国での創立史研究は、

今述べた「南陳北李、相約建党説」に顯著なように、どちらかといえば、党創立の契機を中国人革命家の自助努力に求める傾向が強かったのです。むしろ、コミンテルンなど国外の要因を認めないわけではありませんが、その役割はあくまでも結党を「促進」したという副次的要因にとどまるとされてきました。コミンテルンの働きかけを強調することは、一方で旧ソ連や西側の研究者の見解に同意することを意味し、また他方でコミンテルンからの資金援助問題などに結びつく中共「傀儡党のイメージを与えかねないため、中国国内では慎重に忌避されてきた」と言つてよいでしょう。

緒形 しかし、コミンテルンからの援助を忌むべきものと考えその価値感、あくまでも後世のものであつて、当時の国際共産主義運動や中国人革命家がつけていたものではありませんね。共産主義

の運動とは、国家や民族に縛られた人間をそうした枠組みから解放し連帯させるインターナショナルな運動として出発したのです。

石川 革命運動に国境はなく、国際的な人的・物的援助は忌むべきものどころか、国家の枠組みにしばられた旧来の観念を超克せんとする新たな価値観の体現に他なりませんでした。その後の実態はともかく、その初期においては、それこそがコミンテルンをしてコミンテルンたらしめる新理念でもあった。だからこそ、中共創立に参画した知識人たちはその理念に共感し、それに連なることを充分に意義あるものと考え、少なくともそう自己規定して党は出発したのだということ、これは今日の是非判断を超えた歴史の事実として尊重せねばならないことです。コミンテルンの介入を指摘することは、中共結党の意義をいささかも損なうものではありません。

コミンテルン資料の問題点 ——シュミヤーツキー回想

緒形 では、コミンテルン、ソビエト・ロシア側の資料を丹念にトレースすれば、中共創立の具体像を明らかにできるのでしょうか。

石川 回想録についていうならば、残念ながらコミンテルン関係者のものにも問題は多いと言わざるを得ませんね。先の高一涵の回想と並んで、早い時期に書かれた中共創立史の重要な回想録に、シュミヤーツキー (B. Shumiat'ski) が一九二八年に発表したロシア語の回想「中国の共産主義青年団、共産党の歴史より」(中国共産主義青年団、中国共産党の組織者、張太雷同志を悼む) があります。この文書の信憑性にも実は大きな問題があります。

緒形 シュミヤーツキーは、中共結党当時、コミンテルン執行委員会極東書記局(一九二一年一月にイルクーツクに設立された対中国工作の指導機関)の責任者でした。

石川 彼の回想は、中国語に翻訳されていることもあり、初期中共とコミンテルンの関係に関する研究がほぼ例外なく依拠しているものです。シュミヤーツキーの回想録がこれだけ珍重されるのは、決して理由のないことではありません。一つは、その回想がコミンテルンに派遣された最初の中共黨員とされる張太雷の入露（一九二一年）の事情に関する唯一の資料であること、そして今一つは、その回想録には原文書（イルクーツクで当時出されていた機関誌や会議記録）からの引用がふんだんに盛り込まれているからです。言うなれば、その回想録は単なる回想というよりも、限りなく原文書に近い信憑性を持つものとして、尊重されてきたのです。

緒形 だが、石川さんの精力的な調査によって、このシュミヤーツキー回想も「革命烈士」張太雷の功績を称揚する文章、つまり政治的配慮を込めた「回想」に過ぎないことが明らかとなりました。

石川 シュミヤーツキー回想の原文書からの引用箇所を、それに対応する『コミ

ンテルン極東書記局通報』——これはロシア人研究者の協力を得て入手することができた雑誌ですが——と対照させれば、シュミヤーツキーの引用の仕方が極めてずさんで、恣意的なことは一目瞭然です。

一例を挙げれば、張太雷が入露以前に発表したとして引用されている文章は、実は全て他人の文章（例えば、『労働界』に掲載された陳独秀のもの）ですし、張太雷の関与した天津社会主義青年団の会議記録として紹介されているものの一部は、実際には張とは関係のない広州の青年団のものなのです。恐らく、シュミヤーツキーは一九二八年に張太雷への追悼文を執筆するにあたって、その数年前に自分がイルクーツクで編集したそれらの雑誌をあらためて読み直し、そこから張太雷に関わる材料を探したものの、適当なものが見つからなかったもので、いくら何でも革命的内容を持つものを全て張太雷の功に帰したのでしょう。

緒形 「烈士」張太雷を悼むという必要上、彼を早い時期からの革命家として描

かなければならなかったわけですね。

石川 中国の革命家にまつわるその辺の事情は、緒形さんご自身も『危機のディスクール』で言及されている通りです。

張太雷について言うと、シュミヤーツキーの回想録にはこうした意図的改竄が見られるわけですから、この回想に依拠して張と初期中共との関係やその入露の経緯を検証することは、不可能とまでは言えないにせよ、相当に危険な分析だと言わざるを得ません。

緒形 張太雷の入露問題（時期、およびその際の身分）は、実は中共創立史、特にそのコミンテルンとの初期関係史において、キーになる問題ですね。彼の入露をめぐる諸事情は、彼がはたして入露以前からの黨員であったのかということと合わせて、彼がコミンテルン第三回大会（一九二二年六月七月）に提出した中共代表名義の報告、つまり中共結党時の最重要文書の信憑性の問題にまで結び付いています。

石川 入露した際の張太雷の身分が、これまで言われてきたような「中共の派遣

した代表」ではないとなれば、従来もつとも信用のおける文書とされた、このコミンテルンあて報告の信憑性は、根底から吹き飛んでしまいます。

初期党史の謎の人物、張太雷

緒形 張太雷はこれまで、コミンテルンに派遣された最初の中共黨員と言われ、同時に一九二七年末の広州蜂起で壮烈な最期を遂げたことにより、中共党史の上で揺るぎない地位をあたえられてきました。しかし、よく考えてみると、張太雷はコミンテルン第三回大会で突如、中国共産主義運動の検舞台に登場しており、その前歴は謎に包まれたままです。そもそもいつ誰の紹介で入党したかさえハッキリしない。

石川 広州コミューンにおける壮烈な戦死という輝ける経歴から、張太雷は中共の草創期からのメンバーであったかのごとく考えられてきました。そうした推測が実は明確な資料的根拠を欠くものであるということが指摘されるようになったのは、ごく最近のことです。本書では、



張太雷

近年公表されたコミンテルン関係アルヒーフ資料などにもとづいて、張太雷の身分やその入露の経緯に関して、およそ次のような結論を下しました。

張太雷は入露前、天津でポリシエヴィキ・シンパのロシア人と接触することにより、ソビエト・ロシアに共感を持ち、天津で近しい友人を募って社会主義青年団を結成した。その後、あえていえば独断行動として、一九二一年初頭に自前の天津社会主義青年団を代表して入露、おりから中国人革命家の人材を求めているコミンテルン執行委員会極東書記局のシュミヤーツキーの信任を得て、三月に暫定の極東書記局中国科書記に任命され、中共の委任ではなく、極東書記局の

指名によって中共代表としてコミンテルン大会に出席した。おりから、モスクワには、さまざまな中国代表がコミンテルンの承認を得ようとして参集し、正統争いを繰り広げていたため、張太雷らは極東書記局の得ていた情報などをもとに、やや誇大な内容の報告を作成した。したがって、その報告の内容は必ずしも事実を反映しているとは言えない。

緒形 自前の組織を代表して独断で入露した張太雷とそれを信頼したコミンテルンという構図ですから、相当に大胆な結論になりますね。ある意味では張太雷を自称代表呼ばわりすることにもつながるわけですから、この結論は中国の学界には受け入れられないかもしれませんし、また当時のコミンテルンでそんな杜撰な人選や運営がまかり通っていたはずはない、という常識的反論もあり得ると思うのですが……。

石川 正直言って、わたし自身も、そんなに加減なことがあり得るのか、結論を下すまでにだいたい迷いました。ところが、本を出した後、最近になってこの疑

念を解消してくれる資料が現れました。

ロシアの研究者シェヴエリヨフ(В.В. Шевелев)氏が公表した「コミンテルン極東書記局主席団会議記録(一九二一年七月二〇日、イルクーツク)」です。

その会議記録は次のように伝えています。「コミンテルン第三回大会の」代表の選出は、しばしば偶然に左右された。

……グリゴリー同志(ヴォイチンスキー)が〔中国を〕離れて後、彼ら〔上海の共産党中央〕はコミンテルン極東書記局……から何らの情報も得ていなかった。

彼らは極東書記局の存在すら知らなかった。それで、極東書記局からの電報で、「コミンテルンの」第三回大会に代表を派遣すること、および張同志(張太雷)への〔極東書記局が発給した大会出席の〕信任状の批准を求められると、彼らは喜んだ。張同志は、彼らのもとでは何らの活動もしたことはなかったものの、彼らはそれでもその信任状を批准したのだった。

緒形 なるほど、石川さんの論証が、この新資料によって裏付けられたことになりますね。いわば、コミンテルン第三回

大会への中国代表の派遣は、中国国内組織のあずかり知らぬまま、イルクーツクのコミンテルン極東書記局の主導でなされ、国内の組織とは直接関係のない張太雷が任命されて中共がそれを追認したということになります。

コミンテルンの東方ルート

石川 こうした指令系統の混乱は実は、初期のソビエト・ロシア、コミンテルンの極東への働きかけが、系統を異にするさまざまなルートでなされたことから起こりました。

緒形 ソビエト・ロシア、コミンテルンと中国社会主義者との接触は、コミンテルン第一回大会(一九一九年)に在露中国居留民が参加した時点ですでに始まっています。それが中国国内の人士を対象になされるにあたり、主要な窓口となったのは、シベリア、露領極東のロシア共産党地方組織でした。内戦、干渉戦争の続くそれら地域の党組織は、相互の連絡を欠いたまま、中国へのアプローチを試みましたが、一九二〇年に露領極東

に緩衝国たる「極東共和国」が成立すると、同国の党組織や外交機関も中国国内に接触を行なったため、系統の異なるアプローチが中国国内の共産主義組織化を混乱させるという事態を招いたので。

石川さんの『中国共産党成立史』は、ブルトマン、ポポフ、ボタポフ、アガリョフといった、これまで「謎の密使」とされてきたロシア人の中国での活動を具体的に明らかにされていますが、彼らの活動はこうした組織系統の混乱を背景としていました。

石川 ソビエト・ロシア、極東共和国、コミンテルンの対外活動窓口の一本化は、ウラジオストクのロシア共産党地方組織による正式の使者ヴォイチンスキーの派遣、およびそれら諸機関を統合したコミンテルン執行委員会極東書記局の成立(一九二一年一月)によって、ある程度は実現しました。ヴォイチンスキーは、中国在住のポリシェヴィキ支持者の支援を受けながら、北京、上海で李大釗、陳独秀らと接触し、共産主義組織の結成を促したのです。ただ、そうしたルートの

混乱は、一九二二年初頭にコミンテルン極東書記局が成立したことによって表面的には收拾されたものの……。

緒形 いかんせん、イルクーツクは極東地域からあまりにも遠かった。そのため、情報や人の往来が思うに任せず、便宜的にイルクーツクの極東書記局がモスクワに対して極東地域の諸組織の肩代わりをせざるを得なかったという事情になるわけですね。

石川 朝鮮の共産主義組織(高麗共産党)の場合でも、イルクーツク派と呼ばれる組織は、極東書記局の強い後押しを受けて成立したものでしたから、そうしたケースを「杜撰」と呼ぶかどうかは別として、こうした便宜的処置は、当時においてはかなり広範に見られたと考えられます。中国の場合は、幸いにして、中共が張太雷の代表身分を追認し、また張が帰国後に正式に中共の一員として活動したため、彼の代表資格が問題になることはなかったと言えるでしょう。

中共の組織形成と国際的契機

緒形 さて、回想録に依拠してきたこれまでの創立史研究の諸言説を洗い直すためには、それら回想録の内容を吟味して資料批判を行なわねばなりません。当然のことながら、個々の回想録の信憑性を否定するだけでは、新しい歴史像は生まれてきません。回想に代わる立脚点が必要です。ここで、先ほど石川さんが従来の党史研究に感じた第二の問題、中共の組織形成をとりまく国際的契機をどう研究に取り込むかという問題が浮上してきます。

石川 回想録偏重に代わる中共成立史研究の対案として、私が提示したのは、今言われた共産主義運動の国際的契機を解明するための、内外文献(日本の外務省外交史料館所蔵の資料を含む)の相互対照・相互比較の手法です。元来、マルクス主義や共産主義は、国家のレベルを超えた普遍性をその特徴としており、世界規模の共通言説体系を持っています。また、先に指摘したように、中共の成立に

はソビエト・ロシア、コミンテルンが深く関わっているのですから、マルクス主義の伝播にせよ、結党の過程にせよ、それらがいかなる国際的契機と関係するかを考察しないような中共創立史研究は、そもそも成り立ち得ないはずなのです。本書を「創立史」ではなく、あえて「成立史」と題した理由も、そこにありました。その意味でいえば、これまでの中国の研究は、そうした国外(あるいは国際共産主義運動)への目配りを欠いたままになされる「創立史」研究だったと言わざるを得ないでしょう。

緒形 確かに、例えばマルクス主義やボリシェヴィズムの伝播にしても、中国で当時、誰がどのような著作を発表したかについては、数え切れないほどの研究が出されていますが、それら著作(翻訳や翻案)の藍本やその入手経路について言及されることは稀ですね。

石川 特に社会主義運動の場合、經典著作など文献の流通経路は、それがそのまま運動の連絡ルートに重なることが多いわけで、翻訳のもとになったテキストや

文献伝播の経緯を解明することは、実は単なる書誌学的研究以上の意味を持つということになります。

陳溥賢、李大釗、戴季陶と 日本の社会主義運動

緒形 そうした関心から、『中国共産党成立史』の第一章では、日本のマルクス主義研究と中国の関係を足がかりにして、陳溥賢、李大釗、戴季陶といった初期マルクス主義者が、日本の社会主義運動とも強いつながりを持つていたことを論証しています。

石川 特に注目されるのは、北京の日報紙『晨报』によるマルクス主義の紹介です。同紙の記者である陳溥賢は、『晨报』の文化欄でいち早くマルクス主義紹介を行ないましたが、その記事の多くは河上肇、堺利彦、高島素之らの著作を翻訳したものです。こうした訳業は、「中国におけるマルクス主義の父」と称される李大釗のマルクス主義受容にも大きな影響を与えました。日本語文献によってマルクス主義を受容した李大釗は、その後、日

本の社会主義者の統一戦線の組織である「日本社会主義同盟」にも参加するなど、日本の社会主義運動との連携を強める一方、日本語文献を通じて吸収したマルクス主義に関する知識によって、北京の社会主義運動の中で指導的な役割を担うことになりました。

緒形 日本語文献を媒介とするマルクス主義の紹介は、共産党結成の表舞台となった上海でも見られますね。

石川 上海では、滞日経験を持つ李漢俊、戴季陶らが、精力的に日本語文献からの紹介を行なっています。当時における日本語社会主義文献の影響力の大きさは、中国初のマルクス・エンゲルス著作の完訳たる『共産党宣言』（陳望道訳、一九二〇年）が、堺利彦、幸徳秋水による日本語訳からの重訳であったことから裏付けられます。中共成立前後のマルクス主義の伝播が日本を経由したものだということとは、日本語文献を通じて社会主義の宣伝をした知識人の役割を極めて大きなものにし、マルクス主義という「知識」によって指導される党という共産党

の属性とあいまって、海外の新思潮に通じた知識人の主導による共産主義組織結成を促したと言えるでしょう。

『新青年』『共産党』の 表紙図案の国際性

緒形 さらに、日本経由では入手困難だった革命ロシアやボリシェヴィズムに関する情報を、中国共産主義者がイギリス、アメリカの共産主義刊行物から手に入れていたことが、石川さんの研究で明らかになったことの意義も大きいと思います。草創期の中共黨員は、ソビエト・ロシア以外の欧米社会主義の動向にも、意外なほど通じていたのですね。

石川 意外といえば、中国内外の文献を相互対照した結果、その副産物として、予想もしなかったいくつかの新発見がありました。その一例は、本書で写真を付して説明した雑誌『新青年』と『共産党』の表紙図案です。両雑誌は、ともに建党期中共の機関誌として知られており、その表紙図案は近現代史研究者にはなじみの深いのですが、実は『新青年』のそ

これはアメリカ社会党のシンボルマーク、他方『共産党』のそれはイギリス共産党の機関誌『コミュニスト』のデザインをそのまま模倣したもののなのです。緒形 その『新青年』の性格変化（啓蒙誌から共産主義運動機関誌へ）を示す「ロシア研究」欄の開設とその情報源となった英文雑誌『ソビエト・ロシア』（Soviet Russia）についても、それに関する胡適の言及——「今や『新青年』は、ほとん



『新青年』『共産党』の表紙とそのモデル

ど Soviet Russia の漢訳本となってしまうた——はしばしば引用され、それが胡適の「反動性」を示す証拠とされてきたわけですが、肝腎の『ソビエト・ロシア』の実物を探索してひとくく研究者は、これまで一人としていませんでした。同様に、雑誌『共産党』にアメリカ共産党やイギリス共産党の綱領的文書が翻訳されていても、それは中共建党の機運の高まりを示すものとして扱われるだけで、

それがアメリカやイギリスのいかなる共産党の文書であり、いかなるルートでもたらされたのかを調べようとする研究者も皆無のままでした。

石川 表紙図案に関する発見や種本探しは、それ自体は大したことではありません。だからどうした、と言われればそれまでです。だが、こうした小さな発見が意味を持つのは、先にも述べたように、それが運動の連絡ルートを裏付ける場合があるからです。その意味でいえば、近年公刊されたモスクワ・アルヒーフのヴォイチンスキー報告（一九二〇年八月一七日）で、彼が中国人共産主義者に提供した資料として『ソビエト・ロシア』を挙げているのを見つけた時の喜びは大きかったです。

緒形 そのヴォイチンスキーは、北米に滞在していた時期、アメリカ社会党の黨員でした。つまり、ロシア共産党からの使者ヴォイチンスキーを媒介項とすることによって、欧米と中国との間の社会主義文献の連環は、世界規模で展開していた国際共産主義運動の中に組み込まれて

展開していたことが明らかとなるわけですね。

コミンテルン関係アルヒーフ という無尽蔵の資料宝庫

石川 共産主義運動の国際的契機の解明にとって、きわめて大きな意味を持つのは、旧ソ連の崩壊後、それまでごく一部の研究者が、それも断片的にしか利用できなかったコミンテルン関係のアルヒーフが、ここ十年の間に相当に公開され、ロシアの研究者とイデオロギー抜きで交流ができるようになったことでしょう。もともと、ロシア語の不自由なわたしは、英語や中国語でかれらと交流するしかありませんでしたが……。

緒形 中国革命に関するコミンテルン関係のアルヒーフは、『全連邦共産党（ボ）、コミンテルンと中国国民革命運動』と題して、一九九四年以来、ロシア語版とドイツ語版の刊行が進んでおり、その中国語訳も出版されています。ただし、同資料集に収められている建党時期の文書は、量的に極めて少ないですね。

石川 中共成立史の全貌をうかがうには、まったく足りません。これを補ってくれたのが、個々にモスクワ・アルヒーフの発掘を行なっているロシア、中国の研究者の協力、ならびにコミンテルン各大会の関係文書を網羅的にマイクロ・フィッシュ化した『コミンテルン・アーカイブ』^⑤でした。特に、この『コミンテルン・アーカイブ』の中から、コミンテルン第三回大会の張太雷の信任状（中国国内の組織ではなく、コミンテルン極東書記局が発給したもの）を見つけることができたのは、大きな収穫でした。また、先に述べたシュミヤーツキー回想の信憑性を検証するのに決定的な意味を持つ露語雑誌『コミンテルン極東書記局通報』は、先ほど述べたロシアのシェヴェリョフ氏が見つけて、提供してくれたものです。同誌は、謎に包まれている極東書記局の活動を知る上で欠かすことのできない第一次資料ですが、中共創立史研究で用いられることはありませんでした。

中国共産党は 一九二〇年十一月に成立した

緒形 内外文献の相互対照ということ言うならば、それらの露語資料は、初期中共の文献の考証をするさいにも、ことのほか有用ですね。

石川 そうです。例えば、建党期の最初の公式文書といってもよい「中国共産党宣言」（現存するのは中国語版）は、『コミンテルン極東書記局通報』の後継誌である『極東の諸民族』（一九二二年五月）にその文言を確認することができます。

これによって、一部に後世の偽作ではないかという説もあった「中国共産党宣言」は、まちがいなく当時の文献であったということが確認されたばかりでなく、それが一九二一年五月以前にイルクーツクのコミンテルン極東書記局に渡っていたこと、そして同書記局はそれをもって中共成立の一つの指標と見なしていたことがわかりました。

緒形 この事実と、上海で刊行された中共の機関誌『共産党』の創刊時期（一九

二〇年十一月)から、石川さんは、中共の実質的成立は一九二〇年十一月であって、翌年七月の中共一大は党の第一回大会ではあっても「成立大会」ではない、

というきわめて大胆な結論を導き出されています。もっとも、この結論については、中国大陆の学界が容認することは難しいでしょうが。

石川 むろん、何をもって党の「成立」と呼ぶかには、色々な基準が考えられるわけです。ある程度の組織のまとまりをもって「成立」と呼ぶこともできるし、規約や綱領の作成、あるいは第一回大会をそれぞれ基準とすることもできないわけではない。これに対して、本書では「成立」を、自らがその存在を明確に認知し、目に見える形でそれを宣言した段階と考え、一九二〇年十一月の『共産党』創刊と「中国共産党宣言」をその指標とした

までです。さらに言えば、その「宣言」は、各国「共産党」の認知主体であるコミンテルン組織に受理されているのですから、中共をとりまく外的状況から判断しても、中共一大以前に党はすでに「成

立」していたと考えるのが、妥当ではないでしょうか。

中国に存在した四つの「共産党」

緒形 「成立」という言葉の定義は、コミンテルンなどの国際的契機を視野に入れると全く変わってくるわけですが、そのことは「共産党」という言葉についても当てはまることではないでしょうか。つまり、中国の「共産党」は、終始一貫、現在の中共につながる組織のみだったのか、という問題点です。

石川 そう思います。先に張太雷のことを述べたところで少し言及したように、一九二一年のコミンテルン第三回大会前後のモスクワには、張が代表した党以外に、少なくとも三つか四つの「共産党」を自称する中国人組織の代表が参集しています。当時の中国にあつては、「共産党」なる名称は、まだ陳独秀ら今日の中

共につながる組織の専有物ではなかったのです。

緒形 それら雑派「共産党」の一例として紹介されているのが、全国学連の一部

幹部ら(姚作賓、黄介民)が中心になって結成した共産主義組織「大同党」というものですね。当時、こんな党があったとは！

石川 この組織は、その代表である姚作賓が一九二一年にモスクワを訪れてコミンテルン中央との関係樹立を図ったものの、最終的にはそれに失敗し、間もなく歴史の舞台から姿を消すのですが、実は当初は一部のソビエト・ロシア組織の働きかけを受けて活動していました。また、当時上海で活動し始めていた高麗共産党(上海派)も、どちらかと言えば、陳独秀らの共産党よりも、「大同党」との関係の方が強かったようです。

緒形 それにしても、どんな経緯で、この「大同党」なんかに注目なされたのですか。

石川 日本の社会主義運動を研究している人からの質問がきっかけです。つまり、草創期の日本共産党の党員に近藤栄蔵という人がいて、かれはコミンテルンと連絡をとるために、一九二一年五月に単身上海に渡り、そのさいに中国共産党の姚

作賓や黄介民といった人と会っているのだが、その姚や黄はどういう人なのか、ということを知ったわけだ。ところが、我々が知っている初期の中共黨員に姚作賓や黄介民なんていませんよね。それで、調べてみたらもう一つの「共産党」が浮かび上がってきたという次第です。

緒形 ということは、草創期日本共産党のメンバーたちは、陳独秀の「共産党」ではなく、「大同党」なる組織を中国の「共産党」と見なしていたことになるわけですね。「大同党」と日本の関係にしてもそうですが、コミンテルンの対東アジア工作がある時期まで一本化されていなかったという事情は、「共産党」諸派の分立をはじめとして、東アジアでの共産主義運動の生成を非常に複雑なものにしたということがよくわかります。

石川 さらに言えば、初期高麗共産党の分立（イルクーツク派と上海派）もそうしたソビエト・ロシア側の組織系統の混乱にかかわっています。結果だけを見れば、幸いにも中共は、高麗共産党のような正統争いをめぐる深刻な分派対立を経

験せずに済んだわけですが、中国にもそうした混乱が起こりうる状況はあったと思います。いずれにせよ、中国、日本、朝鮮の共産主義運動を、それぞれ各国史的に切り離して論じては見えてこない部分が相当にあるというのが実感です。

「ヤン・ハウ・デ」とは誰か

緒形 「マルクス・レーニン主義と中国労働運動の相結合した産物」（中国共産党の党創立に関する公式歴史見解）という中共創立史の従来の枠組みを超えて、国際的契機の視点を加味すれば、これまで知られてこなかった実にはさまざまな事実が浮かび上がってくるのです。

石川 国際的契機の探求は、本書の最大の特徴です。ただ、コミンテルン文書など従来利用の困難だった資料もそれなりに渉猟しましたが、いわゆるモスクワ・アルヒーフ全体から見れば、利用し得たのは九牛の一毛に過ぎない。その意味では、本書も近い将来、乗り越えられるべき運命にあると言えるかもしれません。実は、先に紹介した新出の「コミンテル

ン極東書記局主席団会議記録（一九二一年七月二〇日、イルクーツク）」は、張太雷の身分をめぐる本書の結論を補強してくれると同時に、コミンテルン第三回大会の中国代表に関する本書の記述（二五一―二五二頁）について、若干の補正を促す内容を含んでいます。本書出版後、一年を経ずして明らかになったことですので、この対談を借りて補正することにしたいと思います。

緒形 たしか、コミンテルン第三回大会の中国代表は、これまで張太雷と「ヤン・ハウ・デ」だとする説が有力で、その「ヤン」は楊明齋（別名…楊好德）だとされてきました。

石川 これにたいして、本書ではコミンテルンの大合文書にもとづいて、出席した代表が張太雷と俞秀松の二人であることを証明し、「ヤン」がもし代表だったとするならば、それは楊明齋ではなく、俞秀松だと述べました。中国代表が張と俞の二人であることはそれで間違いはないのですが、問題は「ヤン」の方で、実はその極東書記局会議記録には「ヤン・ハ

ウ・デ」が出席者として登場するのみならず、その「ヤン」は中共がコミンテルン第三回大会に派遣した代表だった（イルクーツクまでは来たものの、大会には参加できず）と記されているのです！

大会開催の時期に、楊明齋がイルクーツクにいたことは本書で指摘しました（二五二頁）が、その彼が本来は大会に出席すべく中共から派遣された人物だったとは、思いもよりませんでした。つまり、大会の中国代表に言及する一部の資料や大会に宛てた中共の報告に「ヤン」の名前が見えるのは、兪秀松が「ヤン」なる別名を使ったからではなく、「ヤン」すなわち楊明齋が大会には出席できなかったものの、本来は代表として中国から派遣されてきたからだったというのが、歴史の真相なのです。中共とはそもそも直接のつながりのなかった張太雷が中共代表として出席する一方、他ならぬ中共の派遣による楊明齋がイルクーツクまで来ただけで、大会には出席しなかったとは！緒形 事実は小説よりも奇なりとは、まさにこのことですね。

石川 上記の事例一つをとってみても、中共成立史がいかに錯綜した事象の積み重ねからなっているか、読者の皆さんにはご了解いただけるでしょう。本書には、この他にも、ヴォイチンスキーの活動や中共の初期組織、あるいは一大以前に開催されたとされるいわゆる「中共三月会議」などをめぐる考証が、それこそギツシリと詰まっています。その紹介をするには、すでに討論の時間も尽きており、詳細は直接に本書を手にとって読んでいただくしかありません。なお、本書の概要を中国の研究者に紹介するため、すでに雑誌『百年潮』（二〇〇一年第七期）に「我怎樣写作『中国共产党成立史』」の一文を発表してあることを最後に付け加えてさせて頂きます。

緒形 中国共产党成立後に関する石川さんの新著の刊行を心待ちにしております。本日はありがとうございました。

注

- 〔1〕 邵維正「中国共产党第一次全国代表大会召開日期和出席人數的考証」《中国社会科学》一九八〇年第一期。
- 〔2〕 邵維正「新时期党的創建研究述評」《党的文献》二〇〇一年第一期。
- 〔3〕 蜂屋亮子「中国共产党第一次代表大会文献の重訳と、大会会期・代表についての論考」《お茶の水史学》三十一号、一九八八年。
- 〔4〕 「中国共产党創立八十周年を記念して——新資料」（『極東の諸問題』（露語版）二〇〇一年第四号、中国語訳（李玉貞訳）（俄羅斯新發現の有關中共建党的文件）『百年潮』二〇〇一年第十二期）の第九号文書。
- 〔5〕 *Comintern Archive, 1917-1940: Congresses, microfilms*, Leiden, 1994.